あの日できごと

早川中学校　一年　荒居宙（あらいそら）

僕の住んでいる町は、山間部にあります。一つ一つの部落が、離れていて、その半数は、県道から車で十数分程かけていかなければ着かない所です。全て舗装は、されていますが、山から崩れてきた石や木の枝が、道路に落ちている事もあります。僕の家は、県道から見える所の住宅地で家の前には、川が流れています。そして、住宅地の裏には、沢があり普段は、少しの水しか流れていません。

しかし二〇一一年九月の台風によりこの沢が崩れ、土砂が流出し、住宅地には大量の土砂と泥水が流れこみ前の川も増水し、岸をけずり取られてしまった車があります。僕は、その頃、小学校四年生だったのですがあまり記憶にありません。なので、当時の事を母に聞いてみました。なるべく、思い出したくないと言いながら話してくれました。その日は、台風の影響で雨も風も強く、道路は、通行止

めでした。父も母も仕事を休み、家族四人で自宅にいました。午後になると、さらに雨が強くなり普段のテレビの音量では、聞こえないほどでした。午後二時を過ぎた頃、沢に近い所に住んでいる、おじから電話がありました。おじの電話は、「裏の沢が崩れた。土砂が流れだして、住宅地にまできている。」と言うものでした。その電話で父は、様子を見に行き、母と僕と姉は、家の中で父の帰りを待っていました。しかしその数分後、またおじから電話があり、「このままじゃ、本当に危ないから、どこかへ避難した方がいい。」と言うものでした。僕たちは、準備してあった荷物を持ち僕と姉だけ、友達の家の車に乗せてもらって近所の家に避難させて、もらいました。三十分後には、百m離れたおじの家の近くまで流れ込んできていた泥水は、もう僕の家の前まで、流れていました。母は、この時とてつもない恐怖感におそわれ、父のけいたいへ電話をしたくても手がふるえ何回も何回

もボタンを押しまちがえたと言います。

一方の避難した僕は、何が起きているのかもあまりわからず、ただ近所の友達に会えた事がうれしくて、避難した家の中で楽しく遊んでしまっていたのです。周りの大人の人達は、かわをずっと見ていてどこかへ電話をしていたり、外へ様子を見に行っている様でした。三、四時間たった頃、雨も小雨になり、遠くから重機の音が聞こえてきました。外に出てみると、何台もの大きな重機が住宅地へ流れ混んだ土砂をかき始めました。重機に乗って作業してくれていた人達は、まだ土砂が崩れてくるかもしれない危険な状態の中で、何時間もかけて土砂をかいてくれました。その日、僕たちが家に戻れたのは、夜の八時過ぎた頃です。僕や姉は、家に戻れた事で安心して寝てしまったのですが、父と母は、また崩れてくるかもしれないと言う不安の中で朝までウトウトとする位で寝る事ができなかったと言っています。次の日、家族で外を見に

行きました。目の前に広がっているのは、いつも僕達が見ている、景色とは、まるで違い、道路も空き地も全てが泥にうめつくされていました。僕と姉は、その時始めて、台風のおそろしさ、土砂災害の恐さを知りました。あれから、三年がたち、僕も中学生になり住宅地には、あの時の泥も土砂もありません。沢の周りも補修され、おじの家の裏には、コンクリートの高いていぼうができました。僕達は、また普段の生活に戻る事ができませたが、あの時避難しろと言ってくれたおじ、避難させてくれた家の人、自分達も危険を伴いながら、作業してくれた人達。全ての人達のお陰だと僕は思います。

僕の住んでいる町は、台風が接近すると、すぐに通行止めになってしまう所ですが、母の話しを聞いて日頃からすぐ避難できる備えも大切なのだと学びました。これからは「台風で学校が休みだ。」なんて喜ばずラジオや町内放送で耳から情報を入れ、自分の目で今、

どのような状況かをテレビを見たり、家の外を見ながら、家族と、避難するかどうか、話し合っていきたいです。

そして、僕が大人になって、同じ様な状況になった時にもあの時の大人の人達の様に、状況をはあくして、冷静に対応できる様になりたいです。

コクヨ ケ−10 20×20